

2019年度 理論言語学講座 概要

時間：19：00－20：40（100分）

後期 2019年9月30日～ 全10回（祝祭日の講義はありません）

※[通年講座]は前期から続けての講義ですので、申込受付はしていませんが、ご希望の方は事務局まで直接ご連絡ください。

月曜日	Langacker を読む--認知文法の基礎から最前線まで-- 認知言語学 I		西村 義樹（にしむら・よしき） 東京大学教授 【認知言語学入門】
	講義概要	昨年度に引き続き、「日常の言語使用を可能にする知識の中で文法と意味はどのように関係しているのか？」という言語学の根本問題に対する認知文法の考え方を、この理論の創始者 Ronald W. Langacker の著作を正確に読み解くことを通して、多角的に検討します。その中で、「言語知識・文法・意味とは何か」をめぐる認知文法独自の考え方や対立する理論との本質的な違いが鮮明になるはずです。なお、扱う文献は受講生の興味関心も参考にして決める予定ですが、導入部分以外は、できるだけ昨年度とは異なる文章を選ぶようにします。	
	テキスト・参考文献	講義中に読み解く文献については講義中にコピーを配布します。必要に応じて、Langacker の著作以外の文献を取り上げる可能性もあります。	
	この課目で前提とされる知識など	認知文法を含む) 認知言語学についての知識は前提としないが、受講前に西村義樹・野矢茂樹著『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』（中央公論新社）を通読することをお勧めします。	
	プロフィール	東京大学文学部（言語学研究室）教授 専門は認知言語学、意味論、日英語対照研究。 1989年東京大学大学院人文科学研究科博士課程（英語英米文学専攻）中退。 『構文と事象構造』（共著、研究社、1998）、『認知言語学 I：事象構造』（編著、東京大学出版会、2002）、『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』（共著、中公新書、2013）、『明解言語学辞典』（共編著、三省堂、2015）、『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ：生成文法・認知言語学と日本語学』（共編著、開拓社、2016）、『メンタル・コーパス：母語話者の頭の中には何があるのか』（共編訳、くろしお出版、2017）、『認知文法論 1』（編著、大修館書店、2018）など。	

月曜日	言語にみる、個人と社会 社会言語学 <p style="text-align: right;">嶋田 珠巳(しまだ・たまみ) 明海大学教授 【社会言語学】</p>	
	講義概要	ことばは個人的なものであり、かつ社会的なものでもあります。本講義ではこのテーゼを「言語接触」と「言語と思考」という二つの方向に開きます。社会言語学の意義と可能性を検討したうえで、前半では、言語接触の様々な現象を、言語、話者、コミュニティ、社会の側面から具体的に見ていきます。後半は、とくに言語範疇と文化・思考、言語・脳・社会について考えます。授業は、講義に加え、諸文献を用いて理解を深め、ディスカッションを交えながら行う。1~2回程度ゲスト講師を招く予定です。初めて社会言語学に触れる方から研究の領域に足を踏み込んでいく方まで、幅広い受講を想定しています。
	テキスト・参考文献	テキスト：嶋田珠巳・斎藤兆史・大津由紀雄編『言語接触と日本語の未来』東京大学出版会、2019年春刊行。ハンドアウト、資料文献を配布し、参考文献を適宜紹介します。
	この課目で前提とされる知識など	特にありません。教室でのディスカッションがあらたな知のきっかけになることを期待しています。
	プロフィール	明海大学外国語学部教授。社会言語学、言語接触、アイルランド英語。2007年京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻言語学専修博士後期課程修了。博士（文学）。著書に、『英語という選択-アイルランドの今』（岩波書店 2016年）、 <i>English in Ireland: Beyond Similarities</i> （溪水社 2010年）、共編著に『英語の学び方』（ひつじ書房 2016年）。主な論文として“Speakers’ awareness and the use of <i>do be</i> vs. <i>be after</i> in Hiberno-English”, <i>World Englishes</i> 35, 2016年など。

火曜日	<p>話し者として<日本語らしさ>を考える 認知言語学Ⅱ 池上 嘉彦（いけがみ・よしひこ）昭和女子大学名誉教授 【認知言語学】 通年講座</p>	
	<p>世界の多様な言語音を正しく聞き分け発音し分ける訓練を通してよりよく理解する 音声学の基礎知識と実践的技能 中川裕（なかがわ・ひろし） 東京外国語大学教授 【音声学】</p>	
	講義概要	<p>この授業では、能動的な音声学的技能の実習をしながら、音声学の基礎を身につけることを目指します。実習は、調音音声学と音響音声学に関わります。調音の実習としては、IPA (International Phonetic Alphabet)の枠組みをもとにして、世界の言語で「音素的な区別に用いられている多様な単音の(i)聞き分け、(ii)発音模倣、(iii)模倣した発音の内省、(iv)内省による音声特徴の特定の技能練習をします。それに加えて、音響音声学の初歩として、Praat(インターネットで「容易に入手できる音声学ソフトウェア)を利用しながら、類似する音素と音素の間の音声的な差異や、同一音素の異音と異音の間の音声的な差異を、波形やスペクトログラムにと「のように反映するかを読み取る実習も行います。音響信号の読み取りはスライドで「示しながら練習を進めるので、「ノートパソコンを持参する必要はありません。</p> <p>この授業で「取り扱う言語音は主として分節音で、「最初に肺臓気流による子音、次に非肺臓気流による子音、最後に母音という順序で「技能訓練を進めます。この授業を通して得た実践音声学的技能は、音声学・音韻論的な記述の正確な読解によって理論的な考察をするためにも、言語音の歴史的な変化についてよりよく理解するためにも、言語の現地調査を自分自身で「実施するためにも、音声学・音韻論の応用的研究をするためにも、役に立つはずで</p>
	テキスト・参考文献	適宜プリントを配布します。
	この科目で前提とされる知識など	特にありません。
プロフィール	<p>東京外国語大学総合国際学研究院教授；PhD (Linguistics) 音声学、音韻論、音韻類型論、コイサン言語学 主要業績は下記のページをご覧ください。 https://researchmap.jp/read0158227/</p>	

水曜日	生成文法を基礎からきちんと学ぶ 生成文法Ⅰ 大津 由紀雄（おおつ・ゆきお） 明海大学教授・慶應義塾大学名誉教授 【生成文法入門】 通年講座	
	「意味」の意味を掘り下げる 意味論の基礎 酒井 智宏（さかい・ともひろ） 早稲田大学教授 【意味論】	
	講義概要	意味論は理論言語学の中で一番とつきやすい分野に見えて実は一番とつきにくい分野です。その理由の一つは、ただの「意味論」という分野が存在しないことです。存在するのは形式意味論、語彙意味論、認知意味論、etc. であって、「意味論」ではありません。この講義では、どの立場に立つにせよ、意味について最低限心得ておきたい問題をじっくり考えてみます。昨年度から継続して受講する方にとっても、本年度から新たに受講する方にとっても、等しく有意義な講義となるように努めます。
	テキスト・参考文献	プリントを配布します。参考文献は、授業中に紹介します。
	この課目で前提とされる知識など	予備知識は必要ありません。
	プロフィール	早稲田大学文学学術院准教授 意味論、語用論 2003年東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、博士（学術） 2004年パリ第8大学大学院言語学専攻博士課程修了、Docteur en Sciences du Langage 主要著作：『最新理論言語学用語事典』（分担執筆、朝倉書店、2017）、『理論言語学史』（分担執筆、開拓社、2017）

木曜日	<p>文に主語があるのはなぜか、主語と題目語の区別がある言語とない言語があるのはなぜかに迫る。 日本語文法理論 尾上 圭介（おのえ・けいすけ 東京大学名誉教授【日本語文法理論】 通年講座</p>	
	<p>ことばの理解と産出の過程を探る 心理・神経言語学 酒井 弘（さかい・ひろむ） 早稲田大学教授 【言語心理学】</p>	
	講義概要	<p>ことばの研究が対象とする疑問は、（１）なにを（ことばの体系や原理）、（２）どのように（ことばの理解や産出の過程）、（３）どこで（ことばを生み出しているのは脳のどこか）という３つに分けることができます。この講義では（２）を中心としつつ、ときに（３）に及ぶ疑問に答えようとする研究分野である心理言語学と神経言語学について、研究の歴史、基本的な考え方、研究方法を、いくつかの実例を通して学んでいきます。紹介する研究方法には、読文時間や視線の計測、脳波や脳機能イメージの計測などが含まれます。</p>
	テキスト・参考文献	<p>適宜プリントを配布します。</p>
	この課目で前提とされる知識など	<p>特に前提とする知識は想定していません。</p>
	プロフィール	<p>早稲田大学理工学術院教授 カリフォルニア大学アーヴァイン校大学院修了（Ph. D. , 1996）, 2015年から早稲田大学理工学術院教授。ことばを聞くととき・話すとき、わたしたちの脳の中でなにが起こっているのかという問いに、人間の行動、視線、脳波などを手がかりとして答えようとしています（http://www.celese.sci.waseda.ac.jp/faculty/sakai）。</p>

	<p>静態的・出力説的な文法観に対する動態的・過程説的な文法観の必要性を示す。 文法原論 梶田 優（かじた・まさる）上智大学名誉教授【言語学特殊研究】通年講座</p>
	<p>歴史言語学入門 ことばの変化を分析する 長屋 尚典（ながや・なおのり） 東京大学准教授 【言語学入門】</p>
金曜日	<p>講義概要</p> <p>歴史言語学は言語の変化に関する研究を行う言語学の分野です。この授業では、はじめて歴史言語学を学ぶ人を対象に、さまざまな言語変化現象を取り上げながら、歴史言語学のトピックを一緒に考えていきます。言語変化の事実を音声・音韻、形態論、統語論、意味論について観察することにはじまって、比較言語学から言語系統学、社会言語学、機能主義言語学などの言語変化についての理論的アプローチを紹介し、いろいろな角度から言語変化を考えていきたいと考えています。扱う言語はインド・ヨーロッパ語族やオーストロネシア語族が中心となりますが、日本語の現象もできるだけとりあげます。</p> <p>授業予定は以下の通りです。受講者の興味関心によって内容が変更になる場合もあります。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 音声・音韻の変化（I） 2. 音声・音韻の変化（II） 3. 形態論の変化 4. 統語論の変化 5. 意味の変化 6. 比較言語学（I） 7. 比較言語学（II） 8. 言語系統学と社会言語学的アプローチ 9. 用法基盤モデルによるアプローチ 10. 文法化と構文化
	<p>テキスト・参考文献</p> <p>適宜プリントを配布します。</p>
	<p>この課目で前提とされる知識など</p> <p>言語の歴史を研究するには言語学の全分野にわたる基礎的知識が必要です。授業内でも適宜解説していきますが、言語学概論程度の知識をもっておくことが望ましいです。</p>
	<p>プロフィール</p> <p>東京外国語大学総合国際学研究院准教授 PhD in Linguistics (Rice University, 2011) オーストロネシア諸語、フィールド言語学、言語類型論 主要著作・論文：<i>Japanese/Korean Linguistics</i>, Volume 22 (2015, CSLI Publications; Mikio Giriko, Akiko Takemura, Timothy J. Vance との共編著), “Demonstrative prepositions in Lamaholot” (<i>NUSA</i>, 2017), “Focus and prosody in Tagalog” (<i>Perspectives on Information Structure in Austronesian Languages</i>, 2018) など。</p>